

## パブロ・ピカソのグラッタージュ

### —その絵画の層における透明性と触覚性—

孝岡睦子（公益財団法人大原美術館）

パブロ・ピカソ（Pablo Picasso, 1881–1973）は、その長きにわたる画業の早い段階から絵画のマチエールや重層構造に関心を示し、絵具層の下層、地塗りや支持体を、時に表現の一部とした。このような絵画の重層構造を生かし、マチエールの触覚性を強調することによる画面の構築は、実に多彩で緻密に練り上げられており、ピカソが絵画をただイメージ形成の場のみとしてとらえていなかったことを示してくれる。

ことに、一度覆い隠した部分を再び表面化するというグラッタージュ（搔き落とし、削り落とし）は、1900年頃という早い段階から見るができる。とりわけ、《アヴィニヨンの娘たち》（1907年、ニューヨーク近代美術館）を手掛けた1907年頃から1910年代にかけて、画布や下塗りを表現として取り込む所作とともに、ピカソはそれを繰り返し用いた。そして、この手法は1920年代にピカソの芸術表現のひとつとして固定化され、《卓上のマンダリン》（1924年、ピカソ美術館、パリ）や《古代頭部像のある静物》（1925年、国立近代美術館、ポンピドゥーセンター、パリ）のように、絵具層を削り落とすことによってこそ成立する作品を手掛けるようになる。以後、晩年に至るまで、グラッタージュはピカソの作品に散見できる手法となるのであった。

それでは、絵画をフラットで整えられた均一な平面ではなく、ある種の物質性、触覚性を喚起させる積層物とする感覚、そして、本来ならば封印されている絵画の下層、いわば不可視の領域を現前化するというピカソの感覚は、一体、いかなる文脈において形成されたのだろうか。この問題提起を軸に、本発表では1907年頃から1910年代における作品に焦点を定めつつ、ピカソのグラッタージュを19世紀末に前衛的な意識をもってマチエールの探求に取り組んだフランスの画家たちの動向や、同時代の科学的、疑似科学的な関心とのつながりから検証していく。また、ダニエル＝ヘンリー・カーンワイラーがアフリカ彫刻の造形に見た特質である「透明性」をキーワードとしつつ、ピカソとエックス線写真との関わりにも着目したい。世紀転換期におけるエックス線写真の文化的普及とその背景にある、不可視の可視化、ないしは思考の可視化への欲求とピカソの絵画の層に対する関心との関連性を見る。それによって、絵画表面を削り落とし、下層を露わにするというその行為を、対象の写しから心的イメージの可視化へという視覚表現の認識に対する同時代の変化におけるピカソのひとつの答えととらえたい。

以上のような検証は、先行研究において等閑視されてきたピカソのグラッタージュの特質と意義に光を当てるとのみならず、広義においては、絵画の物質性や重層性、ないしは、作者の身振りが表現の一部となる芸術の中でも初期の事例を提示するものとして重要であると考えている。